

日本女子大学教授

北村

KITAMURA
Akeo曉夫
さんに伺いました

聞き手

北野 利一
編集委員[writer] 駒崎 文男
[photo] 遠藤 宏

2008年12月、22年ぶりの高水位となる高潮に見舞われたヴェネツィア。水都をとりまく自然環境と、それにかかわる人びとの長い歩みの物語。

2008年12月9日(火)
日本女子大学

——2008年の暑夏に『ヴェネツィアと水環境と人間の歴史——』（ピエロ・ペヴィラック著・北村暁夫訳、岩波書店、2008年）という本を発刊されましたが、この本で著者が言いたかったことはなんだったのでしょうか。

北村——ヴェネツィアは18世紀の末まで独立した国家であり、その後さまざまな経緯を経て、今はイタリアという国の一部になっています。原著者は歴史家として、ヴェネツィア共和国という独立した国家が、環境的に不安定な都市のうえに成立していたにもかかわらず、自分たちの国を守るためにどれだけの努力と知恵を絞ってきたかを明らかにしています。そして、19世紀以降のヴェネツィアが他の国の支配を受けるなかで、今まで維持してきた環境を守れなくなり、現在危機的な状況に至っ

ていることと対比することによって、ヴェネツィア共和国時代の経験がわれわれにプラスの教訓を提供してくれているというのが一番大きな主張だと思います。

かつては技術者の役割は非常に大きかった

——現在、ヴェネツィアは半分沈んでいき、同時に海面上昇があり、水害も起こるといふなかで、この著書では土木技術者冥利に尽きるような多くの賛辞が述べられており、土木技術者を的確に評価してくれていると感じたのですが。

北村——かつてヴェネツィアでは、いろいろな川がラグーナ（潟）に流れ込んでいて、それらが土砂を運び、陸地化する危険がありました。現実にヴェネツィアの近辺ではそうしたことが起きていて、歴史的にみても多くのラグーナがす

で失われています。そのなかで危機を免れてきたのは、まさに技術者たちの知恵と、彼らを活かす政治の能力があったからです。ラグーナを守るということは、ヴェネツィアのすべての人びとにとって重要なものであり、そのなかで技術者の役割が非常に大きかったということが強調されています。それに対して今のイタリアでは、技術的に高い能力をもった人たちが、必ずしもしかるべき評価を与えられていないということがあります。かつてはこういう歴史があり、技術者の知恵があったからこそ、ヴェネツィアは環境を守ることが成功しました。そのことを今のわれわれも十分に理解しなければいけないのだと思います。

——そういう意味では彼が告発しているのは、今のイタリアは何をやっているのか、それは技術者たちの英知を結集させる努力があまりに足りないのではないかと、ということですか。日本の場合も最近の世論やメディアでは、そういう

専門的な知を軽んじる傾向があるのかもしれない。

もちろん問題解決のために、いくつかの選択肢があつた場合でも、そのときの技術水準では必ずしも決着が付かない場合があります。そこで、失敗した場合には、技術者としては潔くそれを認め、もう一度やり直す、または別の対策を考えていくことが必要なのではないでしょうか。原著の副題は、地球環境の隠微です。今の地球が抱えている環境問題を考える一つの事例としてヴェネツィアを取り上げているわけです。地球温暖化の問題ではい

ろいろな意見がありますが、技術的な議論を尽くしたうえで対策を取り、うまくいかないときには再考していくということが大切で、それをしなければわれわれの今の問題には対応できないということが、著者の中には非常に強くあるのだと思います。

何もしないことが自然を守ることはない

——干潮時の泥地、砂州、^{ヴェネツィア}「ゲツピ」と呼ばれる無数の水路網など、ヴェネツィアをとりま

く自然の細部を表す表現が、先の訳書のなかに登場します。それらの言葉に、人びとの自然に対する愛を感じます。技術者というと自然を破壊する人と思われているかもしれませんが、しかし、技術者こそ、自然を愛しているがゆえに、自然のなかにわれわれの住むところをつくっていることを改めて確信することができました。

北村——そこは大事な点です。知人の農業史学者と話をしていたときに、ヴェネツィアでは陸地化を食い止めるためにいろいろな技術を駆使することで、自然環境を守ってきたが、それは別の見方をすれば明らかに自然に手を加えているわけで、とてもヨーロッパ的だと言われました。しかし、何もしないことが自然を守ることではありません。いかに自然と折り合いをつけていくかということが大切で、常にそこに技術が介在してきたというのが、人間の歴史だったわけですから、だからこそ、技術者の責任は重いわけで、自分たちがやったことが直接役に立つということもあれば、害を与えることもあるかもしれません。その責任を引き受けなければならぬということでは大変だなと感じます。

——そういう意味では、ヴェネツィアはその成功例として提示していただいているわけで、土木技術者冥利に尽きます。ぜひ、多くの土木技術者の方々に読んでもらいたいと思います。

北村——そのように読んでいただければ、記者としても嬉しい限りです。



北村 暁夫（きたむら・あけお）さん プロフィール

1959年生まれ。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。イタリア近現代史。現在、日本女子大学教授。著訳書に、『ナポリのマラドーナ』（山川出版社）、サルヴァトーレ・ルーポ『マフィアの歴史』（白水社）ほか。